The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ＜書評＞籔亨著『デザイン史 ― その歴史，理論，批評』 |
| Author(s) | 谷本，尚子 |
| Citation | デザイン理論. 2017, 70, p. 106-109 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/65058 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 籔亨著
# 『デザイン史 ── その歴史，理論，批評』
## 作品社，2016年８月

谷本尚子／京都市立芸術大学

『デザイン史 ── その歴史，理論，批評』は，デザイン史の研究史とデザインにまつわる理論と批評を真摯に取り上げた研究書であり，長年にわたりデザイン史を探求してきた著者の研究歴でもある。収録論文の中には『デザイン理論』初出の論文が四本含まれ，第四章「舞台芸術とデザイン」は，1975年『デザイン理論』14号に掲載された「バウハウス舞台工房の意味」の改稿である。

本書の特徴は，19世紀から今日に至るまで，総勢45名を超える著名なデザイン史家及びデザイン理論家達を取り上げ，デザイン史を支える構造を解析している点にある。こうした視点で論じられたデザイン史の研究書はこれまでには無かった。全体で６章14本の論文から成る著者の研究のごく一部ではあるが，簡単に紹介したい。

序章において，著者はデザイン史研究の変容を次のように概観している。

デザイン史は，N. ペヴスナーや H. リード等による美術史や建築史の方法に倣ったモダン・デザインの評価から始まり，彼ら先駆者に対して，G. ギーディオンやゲルト・ゼレ，H. シェーファー等は，産業製品文化批判を基にしたデザイン史観を展開し始めた。そして P. スパークや A. フォーティ等によってさらに多様な文化・社会史的な諸研究が現れ，「二十世紀後半には多元的な方向にデザイン史の研究は展開していくのであった」と説明する。現在のデザイン史は，非常に複雑で多様なデザイン現象を考察する試みと推測しているのだ。

第一章では，タイトルが「十九世紀における美術工業運動」とされているように，著者は初期ヴィクトリア朝のデザイン改革運動に始まる美術と工業との結びつきを採り上げる。そして日本での受容に関して，オーストリア美術工業博物館を経由した産業振興の文脈で論じている。

*「……明治期初期には，美術寄りの「工芸」という述語とは別に，工業寄りの「美術工業」という述語が，明治維新政府による産業の保護奨励の文脈からウィーン万国博覧会関係者の言説に頻繁に現れ始める。（中略）*

*……したがって「美術工業」という述語の日本における受容は，サウス・ケンジントン博物館やオーストリア美術工業博物館をその代表格とする当代美術工業運動への地場への接近であり，そこに工業と美術との関係を改めて経済的で美的な見地から再評価しようとする工業デザイン論の始まりを見ることができよう。」*（pp. 57）

第二章では，ラファエル前派とウィリアム・モリスのアーツ・アンド・クラフト運動の連関を再考することによって，装飾芸術の変革を採り上げ，次にモリスのユートピアの再検討を行い，最後にダルムシュタット芸術家村を採り上げユーゲントシュティールの耽美的な側面について，論じている。この論考では，モリスのユートピアを通じて装飾芸術が人間の必要不可欠な手立てとなり，ダルムシュタットでは P. ベーレンスによって，装飾様式は「生のすべてにかかわる文化的総合の問題（p. 140）」となっていたと，繊細な観察眼で著者は指摘している。

第三章では，N. ペヴスナーがモダン・デザインの文脈の中で位置づけられたモリスの業績について再検討を行っている。すなわち，アーツ・アンド・クラフト運動の思想形成に対して格好の指針を提供したのがモリスであり，イギリスの近代美術工業を導入する上でドイツの産業界が美術工業改革の美的指針として受容し，ヴァン・デ・ヴェルデやムテジウスを通じて，「モリスに対するまさにモダニズム的な判断基準が醸成されて行った。(p. 166)」と認められるのだ。しかしモリスの健全な工作や労働に対する倫理的な要請は現実とはそぐわず，その対立はドイツ工作連盟やバウハウスへと受け継がれる中で，手仕事に重点を置いた「質」と工業生産との対立，芸術と工業との対立として現れた。これに対して著者は，「デザインを芸術と近代工業の創造的な共同行為として把握しながらも，なお芸術を中心にしてデザイン理論を展開することの困難さが露呈されていくのであった。」と指摘している。

本書において最も興味深い議論は，日本における近代美術工業論について論じた項である。「明治末期から大正期にかけての日本では，経済政策研究との関連において美術工業論が台頭している。(p. 184)」明治末期に外国人教師として来日した経済学者 H. ヴェンティヒを通じて，日本の美術工業論が確立していったことに注目している。この「日本における近代美術工業主潮」は，『国際デザイン史』，『アーツ・アンド・クラフツと日本』に掲載された論文を統合し改稿改題したものである。

次に日本の最初期の美術工業論を展開した三人を採り上げ，彼らはモリスを評価しながらも，むしろその批判的なドイツ近代美術工業運動の受容の系譜を引いていると指摘している。

経済学者：戸田海市の『工業経済』(1910年）では，工業は「実用品工業」と「美術工業」に分類され，美術工業品は美術品と工業製品との中間に位置づけられた。

商学士：市川数造の『美術工業論』(1914年）では「美術工業品とは美術的趣味を有する工業品を云う」と定義し（p. 190)，ドイツにおける美術工業的活動が日本の経済にも影響があると注意喚起している。

民衆娯楽研究者である権田保之助の『美術工藝論』(1921年）に関する考察では，美術寄りの美術工芸論ではなく，実質的には産業寄りの社会政策的な美術工業論であると，論じている。権田は『美術工藝論』で，モリスを高く評価しつつも，美術工芸運動は復古運動だと指弾し，「美術工芸運動における思想に復古的 ── 社会政策的 ── 創造的という三つの傾向を見て取り，この三番目の段階にいたって美術工業運動はをの徹底をみることができるとする（p. 194)」と指摘する。

第四章は，「メディアとデザイン」と表題が付けられ，主にバウハウスの舞台芸術及びグラフィック・デザインについて論じている。さらに第四章の三項では，1980年リンツで開かれた「フォーラム・デザイン」展とそれに関連する出版物を採り上げ，デザイン実践や理論形成に果たすメディアの役割について考察している。

著者は「フォーラム・デザイン」展で注目すべき点として，「バナールデザイン Banaldesign」を取り上げている。陳腐なデザインとも訳されるバナールデザインは，ポストモダンの前衛性と同一視され，洗練されたデザインの危機の証左として提示されたという。展覧会の共同組織者 A. ハライターの言葉「幾重にも込み入った総体としてのデザインを可視化し，歴史的な宝探しの歴史主義よりも日常の陳腐で平凡でバナールなものを

選ぶこと」を引用し，現実に適ったデザイン概念の確保が模索されていた，と著者は当時のデザイン理論の状況を説明している（pp. 249-250）。

「フォーラム・デザイン」展がきっかけとなり，デザイン史のあり方やデザインの意味やその多様な機能，さらにはデザイン物品と使用者の関係のみならずデザイナーの役割などへの再検討が始まる。こうした論考をまとめたのが，この展覧会の資料集成『目に見えないデザイン』（1981年）である。著者はスイスの社会学者 L. ブルクハルトと，ドイツのデザイナー／デザイン理論家 J. グロスの論考を参照して，デザインの新たな展開が始まっていることを示した。

ブルクハルトによれば，デザインは目に見えない制度化された組織的な構成要素を探り，一定の外的な周辺条件の共同決定を行うことであり，それゆえデザインは「社会デザイン（Socio-Design）」に心を開くべきだと訴える（pp. 254-255）。

他方で J. グロスは，個々人のアイデンティティ形成の見地から大量生産文化の超克を論じ，本業では無い「半専門家的な領分」から始まる小規模産業の工房生産を，「新しい手仕事」として称揚する（J. グロス）。

著者はバウハウスの舞台やグラフィック・デザインそして『目に見えないデザイン』を通して，デザイン活動が社会のある価値を映し出している様子を記述している。

終章において，著者はデザイン史が一つの学問領域として成立し得るのか，是非を問う。そして従来のデザイン史に異議を唱えデザイン学を唱道した V. マーゴリンと，デザイン史の有用性を論じた A. フォーティの論争を採り上げる。

本書では，『デザイン・イシューズ』誌の編集陣の言葉を借りて「今なお膨張し続けるデザインの学問領域と，既に確立された歴史領域との間の緊張」（p. 275）とデザイン史が抱える課題が指摘された。

その内容の専門性の故に，確かに本書の読者はデザイン史研究家に限られるのかも知れない。一時期アカデミックな研究領域においてもてはやされたデザイン史研究であったが，美術史の亜流の様な不十分な議論も散見される。デザイン史を論じる際の基準は，未だ不確定と言えよう。とはいえ，この様な形でデザイン史を論じた著書は貴重であり，僅かなりともデザイン史に関わる者にとって重要な一冊だといえるだろう。

最後に少し長くなるが，本書の章立てを紹介する。

序章　デザインとデザイン史
　1．モダン・デザインをめぐって
　2．アール・ヌーヴォーの再評価をめぐって
　3．作り手知らずの通俗的なデザインをめぐって
第Ⅰ章　十九世紀における美術工業運動
　── 初期ヴィクトリア朝におけるデザイン意識
　1．「デザイン学校」の成立と展開
　2．ヘンリー・コールと「フェリックス・サマリー美術製品
　3．『ジャーナル・オブ・デザイン』誌のデザイン批評
　結　　び
二　日本における美術工業運動の受容
　1．美術工業運動とサウス・ケンジントン博物館
　2．オーストリア美術工業博物館と日本
　3．ウィーン万国博覧会への日本の参同
　4．日本における美術工芸運動
三　世紀転換期の『パン』誌と美術工業
　1．『パン』誌創刊をめぐって

２．ユーゲントシュティールの進出
４．『パン』誌と新興美術工業
結　　び
第Ⅱ章　装飾芸術と美的ユートピア
一　ラファエル前派運動と装飾芸術
はじめに
１．ラファエル前派友愛団と『芽生え』誌
２．ラファエル前派と挿絵
３．ラファエル前派運動と装飾芸術
おわりに
二　芸術と生活 ── ウィリアム・モリスの美的ユートピアをめぐって ──
はじめに
１．装飾芸術への道程
２．『赤い家』と「モリス・マーシャル・フォークナー紹介」
３．芸術と生活
結　　び
三　ユーゲントシュティールの美的ユートピア ── ダルムシュタット芸術家村をめぐって ──
はじめに
１．エルンスト・ルートヴィヒ大公とダルムシュタット芸術家村
２．芸術の殿堂
３．生と芸術の祭典
４．ユーゲントシュティールの美的ユートピア
結　　び
第Ⅲ章　近代美術工業とデザイン
一　アーツ・アンド・クラフト運動とドイツ近代美術工業運動
１．アーツ・アンド・クラフト運動をめぐって
２．手本としてのイギリスの近代美術工業
３．モダン・デザインへの進展をめぐって
二　創成期のドイツ工作連盟における指導理念 ── 機械とデザインの関連をめぐって ──
（４項に分けられているが，項のタイトルは付けられていない）
三　日本における近代美術工業の主潮
１．ドイツの近代美術工業論 ── 芸術と経済をめぐって ──
２．戸田海市の美術工業論
３．大正期における美術工業論の展開
第Ⅳ章　メディアとデザイン
一　舞台芸術とデザイン
１．舞台芸術の復権
２．バウハウス舞台工房と表現主義演劇
３．バウハウス舞台工房の大要
４．バウハウス舞台工房の意味
二　グラフィック・デザインの近代化とバウハウス
１．ヴァイマル・バウハウスにおける印刷工房
２．タイポグラフィーの核心
３．写真とデザイン
４．デッサウ・バウハウスにおける印刷・広告工房
５．広告部門の編成と展開
６．結び
三　一九八〇年リンツ『フォーラム・デザイン』展とポストモダニズム
１．一九八〇年リンツ『フォーラム・デザイン』展について
２．「目に見えないデザイン」をめぐって
終章　デザイン史の課題
はじめに
１．デザイン研究の学会や学術誌の出現
２．デザイン史かデザイン学か
３．フォーティの反論
おわりに

装丁：籔　晶子